

## 米国民先住民「文明化」教育

——ハンプトン農業師範学校における教育実践とその影響——

一九〇

宮下敬志

一八八〇年代になると、米国東部のプロテスタント系の中上流階級エリート達は、戦争の末に居留地に追いやられた米国民先住民への同情心から、先住民を「助ける」ための運動を各地で組織した<sup>①</sup>。彼らの主な活動目的は、米国風の生活習慣や自立できる職業、キリスト教の信仰などの「文明」を先住民に効率よく与えるための法律や制度を、議会や行政に求めることだった。一方、同じ頃、ワシントンの行政官僚たちも、財政上の理由から先住民を経済的に自立させることを目的とした「文明化」政策の実施を検討していた。思惑が一致した彼らは、議会への請願活動などで協力しながら先住民「文明化」政策を進めていった。先住民を農民として半ば強制的に「文明化」させる方針を定めた一八八七年のドーズ法の議会通過は、彼らの協力が生んだ「成果」である<sup>②</sup>。

同時期に彼らが達成したもう一つの「成果」は、先住民教育に使われる多額の連邦予算の獲得である。当時、先住民の「文明化」のために学校教育は欠かせないと考えられていた。しかしその一方で、白人が通う公立学校に先住民を通学させること、もしくは白人と同じやり方で教育することは、居留地という「野蛮な」環境に住んでいる上に、「遺伝的に劣等な有色人種」である先住民には難しいとも考えられていた<sup>③</sup>。そこで、プロテスタント系エリートや行政官僚は、手作業教育を中心とした特殊な先住民「文明化」教育を寄宿学校で行うという方針を提案することで、先住民専門の学校を国費で建設するための予算を議会から獲得し

た。結果、潤沢な予算を背景に、ドーズ法制定後の十年間で国立の先住民寄宿学校が各地に作られていった。

本稿の扱うハンプトン農業師範学校は、先住民寄宿学校が各地に建設される際にモデルとなった学校である<sup>④</sup>。同校はもともと解放黒人のための私立の寄宿学校だった。しかし、一八七八年に先住民を受け入れると、数年後にはその教育効果がプロテスタント系エリートや行政官僚に高く評価されるようになった。結果、同校で行われた教育実践が新設された国立の先住民寄宿学校にも導入されていき、ドーズ法制定時までにハンプトンは米国で最も権威のある先住民学校になった。受動的に政策を遂行しただけではなく、教育実践が政策に影響を与えたという点で、同校は米国人種マイノリティ史において希有な例である。

以降、本稿は、ハンプトン農業師範学校に注目しながら、その先住民教育の歴史を分析していく。具体的には、第一節では、ハンプトンが先住民教育の権威として「文明化」政策に影響を与えるようになるまでの経緯について、第二節では、ハンプトンの教育現場で「文明化」教育がどのような形で実践されていたかについて説明する。そして、結論では、先住民史や人種マイノリティ史の中に同校の教育実践がどのように位置づけられるかについて、筆者の考えをまとめた。



(写真1) 1902年のハンプトン農業師範学校 (米国議会図書館蔵)

## 第一節 ハンプトン農業師範学校の成立

### 1 校長アームストロングの経歴

はじめに、ハンプトンの事実上の創設者であり、一八九三年に死去するまで校長として指導したサミュエル・C・アームストロングの経歴を紹介する。<sup>⑤</sup>

アームストロングは、一八三九年にハワイ王国にて生まれた白人である。父親のリチャードは、アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) のミッシヨナリーとしてハワイに渡った後に同国の教育長官となった人であり、母親のクラリッサは、ニューヨークの裕福な階層出身で結婚と同時にハワイに来島した典型的なミッシヨナリーの妻であった。したがって、アームストロング家は東部中上流階級の教会エリートの家系に連なっていたといえる。

青年時代のアームストロングは、父の仕事を手伝うなかで、ハワイ先住民教育を行ったミッシヨン学校であるヒロ寄宿学校 (Hilo Boarding School) を観察する機会に恵まれた。手作業教育をそれまでのミッシヨン教育に適応させた最初の学校といわれる同校は、アームストロングを通じてハンプトンの成立に強い影響を与えた。<sup>⑥</sup>

一八六〇年になると、アームストロングはウィリアムズ大学に入学するために渡米した。大学では学業を修めながらも、将来的にハンプトンのパトロンとなる東部のエリートたちとの人脈を積極的に作っていた。卒業と同時に、彼は北軍の志願兵部隊の隊長として南北戦争に従軍し、数年の後に、新しく設立された黒人連隊の大佐に異例の若さで抜擢された。しかし、黒人に対する偏見が強かった彼は、この任務に望んでついたわけではなかった。彼が奴隷解放宣言の際に投函した次の二通の

私信から、それは明白である。

「ネグロ達は、私が見た限りカナカ（ハワイ先住民）達よりも劣っています。彼らのために戦う価値などありません。」

「私は、奴隷解放運動家に分類される者です。かといって、ネグロを愛することを学んでいるわけではありません」<sup>⑦</sup>

本来的に彼が望んだことではなかったとはいえ、この黒人連隊の指揮官としての実戦経験と、戦後の陸軍省解放民管理局 (Freedmen's Bureau) の責任者 (ヴァージニア州第九管区) としての実務経験とは、黒人問題の専門家としてのアームストロングの知名度を高めていった。その結果、一八六八年になると、ヴァージニア州ハンプトンに解放黒人のための男女共学校を建設することを考えていた会衆派のアメリカ伝道協会 (American Missionary Association) によって、アームストロングは、二十代の若さでハンプトンの校長に請われたのである。

## 2 ハンプトンにおける先住民教育のはじまり

ハンプトンの創設にあたって、アメリカ伝道協会は、それまでのミッションスクールと同じように同校を学術教育を中心にした学校にしようとしていた。しかし、アームストロングはその方針に強く反対して、ハワイのヒロ寄宿学校のような手作業教育を中心にした学校にすることを望んだ。その結果、一八七〇年にハンプトンはアメリカ伝道協会から独立することを決めて、アームストロングの指導の下で手作業重視の教育方針を徐々に強化していった。

開校してまもなくのハンプトン学校には、黒人牧師の子どもなど、比較的暮らし向きの良い階層の子どもたちが入学した。彼らは、授業料を払うことができたために、ハンプトンの経営を安定させるためには欠かれない資金源であった。しかしながら、彼らは肉体労働に向いていない者が多かったために、手作業教育による生産品で経費の大部分をまかなうというアームストロングの経営戦略は、修正を余儀なくされた。そこで、「労働力」として期待できる比較的貧しい階層の子どもたちをハンプトンに入学させる計画を新しく進めながら、アームストロングは、これとは別の新しい資金源の獲得を目指していた。

その際に目を付けられたのが先住民の子どもたちである。アームストロングは、先住民の子どもたちをハンプトンに受け入れることで、先住民を管理していた連邦内務省インディアン対策局 (Bureau of Indian Affairs) から補助金を受けようと考えていた。一八七二年に彼が妻にあてた私信では、「私は、多額の資金の獲得を目前にしている。(そのためには) 黒んぼは、インディアンと同じであることを証明する必要がある」と書いている。<sup>⑧</sup>

ハンプトンに先住民が初めて入学したのは、その六年後の一八七八年のことである。この年、西部先住民の戦争捕虜の教育を試みていたりチャード・プラット大尉から、彼の「生徒」たちをハンプトンに入学させたいという申し出があった。これを、渡りに船とアームストロングが快諾したのである。彼は、黒人生徒を退学させることで先住民用の寮舎を確保し、プラットと共に六二人の先住民「生徒」を入学させた。なお、アームストロングが先住民の受け入れを即断したのは、収容所で先住民が作成した工芸品が三年間で五千ドルに及ぶ売り上げを記録していたこともあった。<sup>⑨</sup>



(写真2) ハンプトン入学15ヶ月後の先住民学生 (デンバー公立図書館蔵)

短かい間で彼らの「文明化」に「成果」を上げたハンプトンは、東部で大きな話題となった。なかでも、効果的な先住民の「文明化」の方法を模索していた政策決定者は同校に強い関心を向けた。結果、鳴りもの入りで行われたヘイズ大統領とカール・シュルツ内務長官による視察の後に、アームストロングは、念願だった先住民教育の委託契約を結ぶことに成功したのである<sup>⑩</sup>。

この委託契約では、先住民生徒の選定と確保をハンプトン側に任せることになっていった。そのために、同校はリクルーターを西部の先住民居留地に毎年夏に派遣していった。彼らは、先住民の「文明化」を望む各地のミッシュヨナリーや、インディアン対策局の居留地管理官 (Agent) の全面的な協力を得て、幼児から青年までの幅広い年齢層の入学者を数千キロ離れたヴァージニアまで連れてきた。その結果、ハンプトンは、毎年百人程度の先住民生徒を得て、インディアン対策局から年間二万ドル余りの助成金を受けることになった。

先住民生徒を受け入れることによって、ハンプトンは助成金以外の収入を得ることもできた。例えば、先住民生徒という新たな「労働力」が作りだす農産物や工芸品の売り上げは、ハンプトンの財政基盤を強めた<sup>⑪</sup>。また、「文明化」教育の成果を示すために、「文明的な服装」に身を包んだ先住民生徒の写真を配布したり、「文明化」した先住民生徒を東部で行われた催し物に参加させたりした結果、東部の慈善家たちから多額の寄付金を得ることも成功した<sup>⑫</sup>。

こうしてハンプトンは、最小限の費用で、最大限の「教育的成功」が得られるとの社会的評価を得た。その結果、同校は、その後に建設されていく国立の先住民寄宿学校のモデルとされていった。

## 第二節 ハンプトンにおける先住民教育

第二節では、ハンプトンの学校新聞だった『サザン・ワークマン』の記事を参考にしながら、一八七八年から一八八七年までの間に実践されていた先住民教育の内容を紹介していく。

### 1 先住民生徒と黒人生徒との関係

はじめに、ハンプトンにおける黒人生徒と先住民の生徒の関係について説明しておきたい。先ほど述べたように、ハンプトンでは黒人と先住民と同じ敷地内で教育を受けていた。しかし、両者が校内で顔を合わせる機会はきわめて限られていた。というのも、大半の先住民は、黒人とは異なる「インディアン学級」で教育を受けていたからである。

たしかに、学術教育において両人種の分離が行われたのは、英語の習熟度が異なるためだったと考えられる。しかし、学術教育に限らず、寮を含めた学校生活全体において両人種ははつきりと分離されていた。これは、「人種としての発展段階」で遙かに後ろを行く先住民を、黒人と一緒に教育することは好ましくないと、アームストロングが考えていたからである。<sup>13)</sup>

一方、黒人生徒にしても、「文明化」した存在として扱われていたわけではなかった。例えば、当時のハンプトンは、先住民寮の寮監や手作業教育の補助教員として黒人卒業生を雇うことで経費を節約していたが、「インディアン学級」の学術教育の教員として彼らを雇うことはなかった。なぜなら、正しい英語の発音を身につける環境で育っていない黒人は、先住民教育の担い手にはふさわしくないとみなされていたからである。<sup>14)</sup>

こうした分離教育がなされたために、学校内で両人種が接するのは、師範課程などの上級クラスと一部の手作業教育のクラスとに限られた。

当時教員だったイレイン・グッデルによれば、寄宿舎や授業だけでなく、食堂や余暇、そして日曜礼拝すらも両人種は別々に行動していた。<sup>15)</sup> また、ハンプトンでは、ベースボールが盛んであったが、黒人生徒と先住民生徒のチームとが対戦したとされる記事は、学校新聞にはほとんどみられない。

学校による人種ヒエラルキーの強調は、学校内における生徒同士の対立を招いた。例えば、先住民寄宿舎の寮監を勤めたブッカー・T・ワシントンが回想しているように、黒人生徒たちは先住民生徒を「劣った人種」とみなしており、黒人のために作られたハンプトンに先住民を入学させることに不満を抱いていた。その一方で、先住民生徒たちも「元奴隷」の黒人に指導されることを嫌っており、一八九〇年には学校側の決定した黒人寮監の就任に対して反対運動を起こしている。<sup>16)</sup>

その後も、当時の学校に在籍した黒人と先住民との関係は冷えきったままであり、黒人や先住民の卒業生らも参加した一九一〇年代の権利獲得運動においても、両者が協力して改革にあたることはなかった。ハンプトンでの教育は、先住民と黒人の協調どころか、不和しか生み出さなかったといえるだろう。

### 2 先住民生徒に対する教育実践

ここからは、ハンプトンの先住民生徒に対して行われていた教育実践をいくつかの項目に分けて紹介していく。

#### 男子寮での教育

はじめに、先住民生徒のための男子寮であったウィグワム (Wigwam) で行われた教育について説明したい。ハンプトンは、ウィグワムを寮生が単に寝起きするだけ場所とは考えていなかった

た。それどころか、「文明的」な生活を送るために必要な規律を教えるための教育施設として重んじていたのである。

このような教育目的のために、ハンプトンは黒人卒業生から寮監を募って、先住民寮生の生活全般を監督させていた。そして、彼らの監督が行き届くように、建物の構造も工夫していた。例えば、先住民寮生が寝起きた大部屋から外出しようとする場合、寮監室を必ず通らなくてはならないような仕組みになっていた。

監督をより確実なものにするために、ハンプトンはウイグワムの寮生に寮生会を組織させていた。寮生会は、軍法会議をモデルにした全学の「司令官法廷」の下部組織であり、寮生の飲酒、喫煙、許しを得ずに先住民の母語を話すなどの「不良行為」を日々監視して、それを学校側に報告するという任務を帯びていた<sup>19</sup>。寮生会を指導する「模範的な」寮生には、「学校司令官」と呼ばれた軍隊出身の生活指導教員から、「不良」たちを処罰する権限が特別に与えられていた。そして、規律を破った「不良」たちのなかには、「学校牢」に懲罰として収容された者もいた<sup>20</sup>。

寮監や教師らによる監督を容易にするために、寮生活は規則づくめであった。なかでも時間は厳しく管理されており、ウイグワムの大部屋にて毎朝五時十五分に鳴らされた起床ベルから二時三十分の就寝ベルまでの間、寮生は時計とベルの音で管理されていた。また、起床後と就寝前には軍隊式の点呼があり、休日には生活指導教員らによる大部屋の立ち入り調査も行われていた。そして、遅刻者や違反者は毎夜の集会にて報告され、学校からの逃亡などの著しい違反を犯した寮生は「司令官法廷」に送られることになっていた。寮生の身だしなみについても軍隊同様に厳しく監督されていた。先住民の伝統的な服装が公私ともに禁止されたことはもちろんのこと、多くの部族が誇りとした長髪も不潔であるとみなされて、「ニグロ生徒の理髪師によって」短く刈られた<sup>21</sup>。

こうした規則や規律を「体で覚えさせ」ようとする試みも行われていた。例えば、寮生は学校が主催する軍事教練に参加する決まりがあった。そして、毎朝の登校の際にも、教練で習った軍隊式の縦列行進をしながら校舎へと向かっていった<sup>22</sup>。

このように、寮生活全般にわたって監視・監督態勢がひかれたのは、生産活動を女性に任せて、戦争に明け暮れてきた先住民の男達は「怠惰が遺伝している」というレッテルを、アームストロングが貼っていたからである。つまり、遺伝的に「怠惰な」先住民男性を「文明化」させるためには、子どもの中に厳しく規律をたたき込むことが欠かせないと彼は考えていた。

このようなアームストロングの教育論は、政策決定者や改革者に高く評価された。先住民の「怠惰」な性質について、彼らもアームストロングと同じような考えを持っていたからである。その結果、ハンプトンで行われた軍事教練を始めとする教育方法は、国立の先住民寄宿学校にも導入されていった<sup>23</sup>。

「インディアン学級」での学術教育 続いて、先住民生徒が受けた学術教育について説明したい。「インディアン学級」での学術教育は、朝の八時半から昼の十二時までの半日間行われた<sup>24</sup>。授業では、英語を中心としながら地理、歴史、算術などが教えられた。習熟度別にクラスが分けられていたが、教授内容は上級クラスでもグラマースクール以下の水準に止まった。なぜなら、先住民が「野蛮人特有の優れた記憶力」で教科書の内容を記憶できたとしても、それを理解したり、応用したりすることは、彼らが「白人より発展段階において千年以上遅れている」ために時間の無駄であると、アームストロングが考えていたからで

ある。<sup>23</sup>

「インディアン学級」の教育内容をみると、先住民に原稿を書かせてスピーチさせるといふ教育が積極的に行われていたことがわかる。そのような原稿は、しばしば学校行事の際に発表され、その一部は『ザサン・ワークマン』に載せられたが、多くの場合、ハンプトンに入学して自分たちがどれほど「進歩」したかを、先住民生徒に語らせたものだった。例えばスー族の一七歳の少年は、先住民男性が「野良仕事」を女性に押しつけてきたことを批判しながら、今後は白人のように、女性は家事を、男性は農業や大工仕事を学ぶべきであると力説している。<sup>24</sup>

地理や歴史の授業では、白人の教科書を用いながら、米国の歴史などが中心に教えられた。女性教師の中には、先住民の祖先達の活躍を教えるなど先住民生徒に配慮した授業を行う者もいたが、大半は、現在までの先住民「人種」を文明に相反する「野蛮人」と教えていた。<sup>25</sup>

典型的なのは、一八八四年二月の『ザサン・ワークマン』に掲載された地理学の試験である。これは、教師が説明文を示した後に、質問事項に生徒が答えていくという形式で行われたものだったが、その説明文と質問事項には人種差別主義が強くみられた。

#### ■説明文の抜粋■

白色人種、黄色人種、黒色人種、赤色人種（米国先住民）、茶色人種という五種類の人種がある。．．（中略）．．コーカソ

イドは、世界中で最も強靱である。半文明化している人々は、彼ら自身の文明を持っているが、白色人種のそれとは異なっている。

野蛮人種は彼らの慣習を保持しながら、主に猟師、漁師、戦

士という三つの職業についている。白色人種は、主に農民、製造業者、商人という三つの職業についている。白色人種は文明化しており、彼らは全てのもを所有している。そして、学校で読み書きを習うので新聞が読める。黄色人種は、半文明化しており、一部の者は読み書きができる。また、他人に迷惑をかけずに自分たちのことができる。赤色人種は甚だしい野蛮人である。彼らは全く何も知らない．．。

#### ■質問事項の抜粋■

質問⑨ 我々全員が所属している種はなにか。

質問⑩ 人種には、どのような階級があるか。

質問⑪ その最も上位の階級に位置するのはなにか。

質問⑫ それに続くものはなにか。

質問⑬ それに続くものはなにか。

質問⑭ それに続くものはなにか。

質問⑮ 白色人種について知っていることを書きなさい。

ハンプトンで、人種差別主義的、白人至上主義的な教育を受けた先住民生徒は、（少なくとも公然とは）教師が与えた「知識」に抵抗できなかった。例えば、右記のような問いに対して、ある生徒は次のように答えた。

回答⑨ 人類。

回答⑩ 人類には五つの大きな階級がある。

回答⑪ 白色人種が最も有能である。

回答⑫ モンゴリアン、ないし、黄色人種と呼ばれるもの。

回答⑬ エチオピアン、ないし、黒色人種と呼ばれるもの。

回答⑭ アメリカンズ、ないし、赤色人種と呼ばれるもの。

回答⑮ コーカソイドは、全ての人種に抜きんでている。彼らは、他の人種よりも多くのことを考えた。そして、何者かが大地を作ったのではないかと考えた。もし白色人種が探し当てなかったら誰もそれを知り得なかっただろう。それは、(キリスト教の)神である。

このように、「インディアン学級」で教えられた授業は、白人と「白人の文明」とを最上位に位置づけた人種差別主義に基づくものであった。そして、こうした教育方針は、その後作られた国立の先住民寄宿学校でも、基本的に見直されることはなかった。

**手作業教育** 次に、ハンプトンで行われていた手作業教育について説明したい。「インディアン学級」に通った先住民の場合、手作業教育は、正午過ぎから夕方十八時まで行われていた<sup>27)</sup>。開講されていた科目は、男子は、農業、靴作り、大工、ブリキ加工、馬具製造、工芸などであり、女子は、料理、縫い物、洗濯などであった。教えられた科目からわかるように、男子は賃金労働に従事し、女子は家庭を守るといふ、当時の白人中産層の規範に沿ったカリキュラムだった。なお、手作業労働に従事する男子の場合、僅かな賃金が支払われる場合もあったが、自身の衣料代などはそこから支払われた<sup>28)</sup>。

アームストロングによれば、ハンプトンでの一年間の生活で、先住民は立派な「十時間労働者」になった。しかし、それでも、遺産のために先住民生徒は今後とも白人労働者のようにはなれないとハンプトンの教師たちは考えていた。アームストロングも、「勤勉さや持続性というア

ングロサクソン(の労働者)に与えられた天賦の才能を獲得することはできないだろう」と、手作業労働に従事した先住民生徒たちを評した<sup>29)</sup>。

日々の手作業教育とは別に、先住民生徒には、マサチューセッツ州を中心とした東部の農家に住み込み労働に向くアウトディング(Outing)と呼ばれる夏休み中の課外授業が課された。当初は一部の先住民のみに課されたものだったが、一八八〇年代末までには、大半の先住民生徒が東部で夏を過ごすことになった。往復の汽車賃と僅かな賃金の負担のみで季節労働者が安価で得られるために、この制度はマサチューセッツの農家の間で評判をよんだのである<sup>30)</sup>。

ハンプトンは、先住民が「文明」に直に触れることのできる貴重な機会とこの制度を位置づけて教育上重んじていた。しかし、生徒が実家に帰省させる旅費や学校滞在費をハンプトンが費やさずに済むという、学校経営上のメリットがあったことも考慮に入れる必要があるだろう。なお、学校での手作業労働教育と共に、このアウトディングもその後の国立の先住民寄宿学校に導入されていた。

**キリスト教教育** 最後に、ハンプトンにおけるキリスト教教育について説明したい。アメリカ伝道協会から独立して以後、ハンプトンは、特定のプロテスタント教派に属さなかった。しかし、牧師養成クラスを持つなど、キリスト教教育には引きつづき熱心であった。とりわけ、先住民に対するキリスト教教育には力を入れていた。大半が異教徒である先住民が「文明化」するにあたっては、各部族の伝統的な信仰を捨てて、キリスト教徒となることが必須であると、アームストロングも常々主張していた。

したがって、先住民生徒には、教会礼拝の時間が毎日設けられていた



ほかに、休日には日曜礼拝に参加することが求められた。また、夕食後のウィグワムにおいては、信仰集会も催されていた。<sup>⑧</sup>

このようなキリスト教教育を重視する方針は、西部の国立の先住民寄宿学校にも継承された。国立学校は政教分離を原則としていたが、ミッシヨナリーによる先住民生徒への布教活動には、先住民の「文明化」の<sup>かなめ</sup>要として最大限の敬意が払われたのである。

## おわりに

### 1 ハンプトン教育の歴史的な位相

以上、本稿は、ハンプトン農業師範学校成立までの歴史と、同校における先住民教育の実践過程とについて論じてきた。

第一節では、ハンプトンに先住民が受け入れられるまでの過程について論じた。その結果、①同校は、ハワイ先住民教育の影響を受けたアイムストロングにより、南北戦争以後に解放黒人のための農業師範学校として成立した学校であったこと、②一八七八年以降先住民を受け入れるようになった背景には学校の財政的な事情があったこと、以上二点が明らかとなった。

第二節では、ハンプトン農業師範学校で一八八〇年代に行われていた先住民教育の実践過程について論じた。その結果、同校の学校関係者は、①先住民を「怠惰な」人種であるにとらえて、生活の細部まで規則で定められた軍隊式の訓練を施していたこと、②先住民を「劣等人種」ととらえて、初歩的な読み書きと手作業教育を中心とした教育を施していたこと、③先住民の「文明化」にはキリスト教信仰が不可欠であるにとらえて、キリスト教教育をとりわけ熱心に行っていたこと、以上三点が明

らかとなった。

冒頭で説明したように、第二節で分析した時代の直後にあたる十年間は、「文明化」教育が、プロテスタント系エリートや行政官僚の間で強く求められ、連邦政府の先住民教育予算が飛躍的に増えた時期にあたる。

とりわけ、一八八九年にアームストロングと親交のあった教育者のトマス・J・モーガン牧師が連邦インディアン対策局長 (Commissioner of Indian Affairs) に就任して以後、米国西部の各地には国立の先住民寄宿学校が多く建設されていった。そして、くりかえし述べてきたように、ハンプトンがこれらの国立学校の重要なモデルとされていった。

では、なぜハンプトン式の教育が国立学校に導入されたのであろうか。本稿の分析をふまえれば、それは次の三点にまとめられるだろう。

第一に、ハンプトンの教育方針が「経済的」であったからである。手作業労働で経費の多くを賄うハンプトンの方式の教育によって、最小限の費用で先住民の「文明化」(ひいては、農民化を通しての自立)が達成できると行政官僚たちは考えたのである。

第二に、ハンプトンの教育方針が「合理的」であったからである。当時の政策決定者や改革者の多くは、アームストロングと同様に、先住民を劣等人種と考えていた。<sup>⑨</sup>そのため、先住民を劣等人種とみなしてその能力の許す範囲での教育に限定するハンプトンの教育方針は、行政官僚や連邦議員たちの強い支持を受けたのである。

第三に、ハンプトンの教育方針が、特定のキリスト教派に偏らないものだったからである。別の機会に論じたように、国立の先住民寄宿学校が「プロテスタントよりである」とカトリックから批判を受けたために、当時のインディアン対策局は、特定の宗派によらずに先住民をキリスト教徒にできる制度を作り上げる必要が生じた。その際に、特定

の教派を持たないが、きわめてキリスト教的であるハンプトン教育は、格好のモデルとなりえたのである。<sup>③</sup>

このような政治・行政的な思惑は、先住民教育機関としてのハンプトンの権威をいっそう高めていった。そして、教育現場のレベルでもハンプトン出身者の評価があがり、元教師が居留地の教育行政における重要なポストにいたり、各学校にハンプトンの卒業生が教員として赴任することが求められたりするようになった。結果、手作業教育、規律訓練、キリスト教教育を重要視する「ハンプトン」の教育実践は、彼らの手によって西部各地へと直接運ばれていったのである。

こうして十九世紀末に国立の先住民寄宿学校へと広がったハンプトン式の先住民「文明化」教育は、その後も二十世紀半ばまで先住民教育全体の目標でありつづけた。そのため、先住民の「教育可能性」を軽視し、「劣等人種」として扱うハンプトンの教育実践は、長い間、抜本的に見直されることはなかったのである。これらの点をふまえれば、現在まで続く米国先住民居留地の「植民地」的な状況に与えたハンプトン教育の影響を、我々は少なく見積もることができない。

## 2 今後の見通し

本稿は、十九世紀末以降の先住民教育史を理解する上で、ハンプトンがきわめて重要な分析対象であることを説明し、そのように結論づけた。

ここで最後に付けくわえておきたいのは、ハンプトンの影響は、先住民教育、あるいは黒人教育に止まらないというところである。なぜなら、二十世紀にまで分析の範囲をひろげた場合、ハンプトン式の先住民教育は、米国植民地の教育政策としてフィリピンにまで導入されているから

である。<sup>④</sup>

したがって、ハワイ先住民教育に端を発し、解放黒人教育、先住民教育を経由して、植民地フィリピンの教育に至るといふ、米国近代における人種マイノリティ教育史の系譜の中に位置づけられない限り、ハンプトンの先住民教育は、歴史的に正しく位置づけられたとはいえない。

そこで、筆者は、十九世紀の「国内植民地」と二十世紀の（公式）植民地との間の実践過程の連続性に注目しながら、ハンプトンにおける先住民教育を米国帝国史研究として分析していくつもりである。<sup>⑤</sup> これについては、別の機会に改めて論じたい。

## 注

① William T. Hagan, *The Indian Rights Association: The Herbert Welsh Years, 1882-1904* (Tucson: Univ. of Arizona Press, 1985); 各地で組織された運動については、宮下敬志「一九世紀末から革新主義時代にかけてのアメリカ東部諸改革運動の系譜—アメリカ先住民（インディアン）改革者の分析を通して」『立命館文学』五八〇号（二〇〇三年六月）、二二～四六と、宮下敬志「アメリカ革新主義におけるマイノリティ改革者—その人的ネットワークの分析」『西洋史学』二二二号（二〇〇六年一月）、四四～五九を参照。

② Francis Paul Prucha, *The Great Father: The United States Government and the American Indians*, unabridged ed. (Lincoln: Univ. of Nebraska, 1984; reprint, 1995), 501-33; Robert H. Keller, Jr., *American Protestantism and United States Indian Policy, 1869-82* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1983), 189-93; 『ユース法ごころいせ』 Francis Paul Prucha, *American Indian Policy in Crisis: Christian Reformers and the Indian, 1865-1900* (Norman: Univ. of Oklahoma Press, 1976), 227-64; Janet A. McDonnell, *The Dispossession of the American Indian, 1887-1934* (Bloomington: Univ. of Indiana Press, 1991), 1-5; W. E. ウォッシュバーン「ドーズ法とアメリカ・インディ

アンインディアン部族制の破壊」鶴月裕典・西出敬一訳『札幌学院大  
学人文学会紀要』四五号（一九八九年八月）、二二〇―二二九を参照。

③ 別の機会に論じたように、当時の政策決定者やプロテスタント系エリ  
ート達は、肉体的な特徴だけではなく、知性も後天的に遺伝すると思えて  
いた。そして、歴史を通して形成されてきた先住民の「劣等性」は、数  
世代では改善不可能であるとみなしていた。宮下「アメリカ革新主義に  
おけるマイノリティ改革者」、四七―四八。

④ ハンプトン農業師範学校についての研究は、暗黙にハンプトン式の手  
作業教育を批判した一九〇三年のデュボイスの著作に始まる。W・E・  
B・デュボイス『黒人のたましい』木島始訳、岩波文庫（岩波書店、一  
九九二年）。その後の黒人教育史研究は、ハンプトンの教育が新たな従属  
（新しい奴隷制）を招いたと批判した。Donald Spivey, *Schooling for  
the New Slavery: Black Industrial Education, 1868-1915*,  
Contributions in Afro-American and African Studies (Westport:  
Greenwood Press, 1978; Trenton: Africa World Press, 2006), 1-162. 又  
黒人の社会的上昇を限定的にし、か追跡しなかつたハンプトン学校の教育  
を批判した。Anderson, James, *The Education of Blacks in the South:  
1860-1935* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1988), 33-78  
が重要である。ハンプトンにおける先住民教育を扱った文献は、  
Jacqueline Fear-Segal, "Nineteenth-Century Indian Education:  
Universalism Versus Evolutionism," *Journal of American Studies* 33  
(Spring 1999) : 323-41; Donal F. Lindsey, *Indians at Hampton  
Institute, 1877-1923* (Urbana: Univ. of Illinois Press, 1995), 1-276;  
Paulette Fairbanks Molin, "Training the Hand, The Head, and the  
Heart": Indian Education at Hampton Institute," *Minnesota History*  
51 (Fall 1988) : 82-98; David Wallace Adams, "Education in Hues:  
Red and Black at Hampton Institute, 1878-1893," *South Atlantic  
Quarterly* 76 (Spring, 1977) : 159-76 がある。

⑤ サムエル・C・ホープストロムについて Robert Francis  
Engs, *Educating the Disfranchised and Disinherited: Samuel  
Chapman Armstrong and Hampton Institute, 1839-1893* (Knoxville:

Univ. of Tennessee Press, 1999), 1-168; Francis Greenwood Peabody,  
*Education for Life: The Story of Hampton Institute* (Hampton: Press of  
the Hampton Normal and Agricultural Institute, 1914), 1-325; Edith  
Armstrong Talbot, *Samuel Chapman Armstrong: A Biographical  
Study* (New York, Page and Company, 1904), 3-301. 参照。

⑥ Lindsey, *Indians at Hampton Institute*, 1-3; Robert Francis Engs,  
*Educating the Disfranchised and Disinherited*, 1-12.

⑦ Lindsey, *Indians at Hampton Institute*, 3-7; Engs, *Educating the  
Disfranchised and Disinherited*, 34-44; Samuel Chapman Armstrong  
to Baxter Armstrong, 8 December 1862, quoted in Engs, *Educating  
the Disfranchised and Disinherited*, 41; Samuel Chapman Armstrong  
to A. Hopkins, 8 December 1862, quoted in Engs, *Educating the  
Disfranchised and Disinherited*, 41.

⑧ Engs, *Educating the Disfranchised and Disinherited*, 57-85, 99-114;  
Samuel Chapman Armstrong to Emma W. Armstrong, 5 June 1872,  
quoted in Engs, *Educating the Disfranchised and Disinherited*, 114;  
学校創設期のハンプトンについて Southern Workman 1 (January  
1872) : 1-2 を参照。

⑨ Lindsey, *Indians at Hampton Institute*, 19-33; Prucha, *American  
Indian Policy in Crisis*, 271-74; Richard Henry Pratt, *Battlefield and  
Classroom: Four Decades with the American Indian*, trans. Robert M.  
Utley (New Haven: Yale Univ. Press, 1964), 180-204; Elaine Goodale  
Eastman, *Pratt, the Red Man's Moses* (Norman, 1935), 53-75;  
*Southern Workman* 7 (Jane 1878) : 91-2; *Southern Workman* 9  
(October 1880) : 91-92; 又、ハンプトンで手作業教育を学んだブラッ  
ト大尉は、その後、ペンシルバニア州にあった元軍用宿舎にカーライル  
インディアン学校を設立して、同校の校長に就任している。カーライル  
は、ハンプトンと並んで一八八〇年代のインディアン寄宿学校のパイオ  
ニアであった。カーライルについて Fear-Segal, "Nineteenth-  
Century Indian Education" : 323-41; Frederick J. Stefon, "Richard  
Henry Pratt and His Indians," *Journal of Ethnic Studies* 15-2

- (Summer 1987): 86-112を参照。
- ⑩ ハンプトンは、一八八一会計年度において、六五人の先住民を受け入れて、政府から約八千ドルの助成を受けた。そして、一八八四年までには百人以上の先住民がハンプトンに在学するようになり、一八八六年以降は、約二万ドルが毎年政府から助成されるようになった。助成額の変遷については、Department of Interior, Bureau of Indian Affairs, *Annual Report of the Commissioner of Indian Affairs to the Secretary of the Interior* (Washington, D. C.: GPO, 1880-1900) に収録された各年のインディアン対策局の歳出報告を参照。なお、インディアン対策局がハンプトンに支援を決めたのは、先住民教育の利権をカーライルインディアン学校を創設した陸軍省から奪うためでもあった。これは功を奏して、十九世紀末の先住民教育政策は、カーライルを含めてインディアン対策局の監督下に置かれることになっていった。
- ⑪ 例えば、一八八二会計年度には、一万六七〇〇ドルのインディアン対策局からの助成の他に、黒人と先住民による労働によって、ハンプトンは、(学校内で自己消費される物品を除いて)三六七九ドルを得ていた *Southern Workman* 11 (June 1882): 71.
- ⑫ 例えば、一八八三会計年度には、ハンプトンの先住民教育部門への寄付金として、約六万ドルが集まった。 *Southern Workman* 12 (June 1883) 71; また、こうした寄付を得るために有力者の学校見学の招聘活動が行われた。前述のヘイズ大統領の来訪をはじめとして、一八八一年にはガーフィールド大統領も視察した。 *Southern Workman* 10 (July 1881): 74.
- ⑬ *Southern Workman* 14 (June 1885): 69; *Southern Workman* 11 (June 1882): 68; 先住民生徒と黒人生徒とは、一八八六年までは同じ食堂を使っていたが、テーブルは、人種と性別ではっきりと分離されていた。
- ⑭ *Southern Workman* 8 (September 1879): 71; ハンプトンにおいて行われた英語教育については、Ruth Spack "English Pedagogy, and Ideology: A Case Study of the Hampton Institute, 1878-1900," *American Indian Culture and Research Journal* 24 (2000): 1-24を参照。なお、黒人教師たちは待遇の面でも差別されていた。例えば、教員食堂は、小さくて常に混んでいる有色人種の教員用の食堂と、来賓も招けるほどにゆったりとした白人教員用の食堂とがはっきりと分けられていた。徹底的な人種分離がハンプトンの特徴であったが、食事という社交の場でそれはとりわけ顕著だったといえる。リンゼイによれば、一八八九年に黒人教師の側から教員食堂の共通化が訴えられた。ハンプトンでは、対応について白人教員にアンケート調査をおこなった。それに対して、教員たちは、たびたび招かれる南部の有力白人の歓待の場に黒人がいることはふさわしくないし、もし黒人教師を社交の場に招けば、黒人教師に彼らの正しい社会的地位についての間違った認識を与える危険があるとの回答をした。結果、共通化は見送られて、ハンプトンでは生徒・教員共に、人種差別主義に基づいた生活空間の区分けが続いた。 Lindsey, *Indians at Hampton Institute*, 137-43.
- ⑮ Eastman, Pratt, 61.
- ⑯ Engs, *Educating the Disfranchised and Disinherited*, 115-129; Booker T. Washington, *The Story of Negro: The Rise of the Race from Slavery* (New York: Doubleday, 1909), 138; デュボントンは「平均的なインディアン学生は、白人よりも上にいると信じていた」、黒人よりも遙かに上にいると信じていた」と回想している。 Booker T. Washington, *Up from Slavery: An Autobiography* (Boston: Houghton Mifflin, 1901), 80-81.
- ⑰ Lindsey, *Indians at Hampton Institute*, 124-31.
- ⑱ Department of Interior, Bureau of Indian Affairs, *Annual Report of the Commissioner of Indian Affairs to the Secretary of the Interior for the Year 1888* (Washington, D. C.: GPO, 1888), 13; 一八八八年に「この「学校半」は、内務長官の命令で行われたT・S・チャイルドの査察によって、非人道的だと非難された。このような学校半はハンプトンに特有のものではなく、国立の先住民寄宿学校であるハスキルインディアン学校などでもみられた。Department of Interior, Bureau of Indian Affairs, *Annual Report of the Commissioner of Indian Affairs to the Secretary of the Interior for the Year 1889* (Washington, D. C.: GPO, 1889), 320-21.

- ①⑨ *Southern Workman* 9 (November 1880) : 114; *Southern Workman* 10 (March 1881) : 71.
- ②⑩ *Southern Workman* 12 (June 1883) : 73.
- ②⑪ 先住民男性が人種的に「怠惰である」とみなす発言は、アームストロングに限らず、政策決定者や改革者に一般的にみられた。
- ②⑫ しかし、各部落との条約において連邦政府による教育の無償提供の規定がない場合は、日中に十時間労働し、夜学で二時間のみ学ぶ者もいた。
- ②⑬ *Southern Workman* 13 (June 1884) : 68-69; *Southern Workman* 9 (November 1880) : 114.
- ②⑭ *Southern Workman* 10 (March 1881) : 71; なお、学校新聞の読者には、ハンプトンのパトロンである東部の慈善家達も想定されていた。そのために、このような記事が盛んに掲載されたのである。
- ②⑮ *Southern Workman* 13 (June 1884) : 69.
- ②⑯ *Southern Workman* 14 (February 1884) : 20.
- ②⑰ 師範課程に在籍した先住民の場合は、日によって手作業と学術教育が分けられていた。*Southern Workman* 14 (June 1884) : 64.
- ②⑱ *Southern Workman* 13 (June 1884) : 63-64, 69-70.
- ②⑲ *Southern Workman* 9 (November 1880) : 114.
- ③⑰ アウティングについては、Lindsey, *Indians at Hampton Institute*: 36-38 も参照。
- ③⑱ *Southern Workman* 13 (June 1884) : 71; *Southern Workman* 12 (April 1883) : 43; なお、宗教的な配慮からエピソード派とカトリックを信仰している先住民については、平日の学校礼拝への出席が免除された。
- ③⑳ 宮下「アメリカ革新主義におけるマイノリティ改革者」、四七〜四八。
- ③㉑ 宮下敬志『「文明化」ミッションにおける白人改革者の利害―十九世紀末アメリカ先住民契約学校制度の分析』『立命館史学』二七号（二〇〇六年十一月）、四一〜六九。
- ③㉒ これについては、宮下敬志「国内植民地をめぐって―アメリカ合衆国における国内植民地と島嶼部植民地」『立命館言語文化研究』十八巻一号（二〇〇七年十月）、七七〜八四を参照。
- ③㉓ 米国史における「国内植民地」と（公式）植民地という問題設定については、宮下敬志『「アメリカ・インディアン改革」から『植民地改革』へ―人種マイノリティ「改革」者のハワイ・フィリピン・プエルトリコ「改革」への関与、一九〇〇〜一九一〇』『立命館文学』五九七号（二〇〇七年二月）、一二五〜一四三も参照。

（本学客員研究員）